

【実践事例4】 愛知県立豊川養護学校

1 概要

本校は、平成16年度から校務分掌に地域支援部を新規に組織した。7名でスタートし、地域のニーズを探るための教育機関に対するアンケート調査を実施することから活動を開始した。アンケート結果から、豊川市内の幼稚園、保育所、小学校、中学校の半数以上が期待する本校のセンター的機能（複数回答可）は、次の四つであることが分かった。括弧内の数字は、回答全体に占める割合を示す。

就学相談も含めた、保護者や教員に対する教育相談機能（95%）

特別支援教育に関する内容の研修機能（68%）

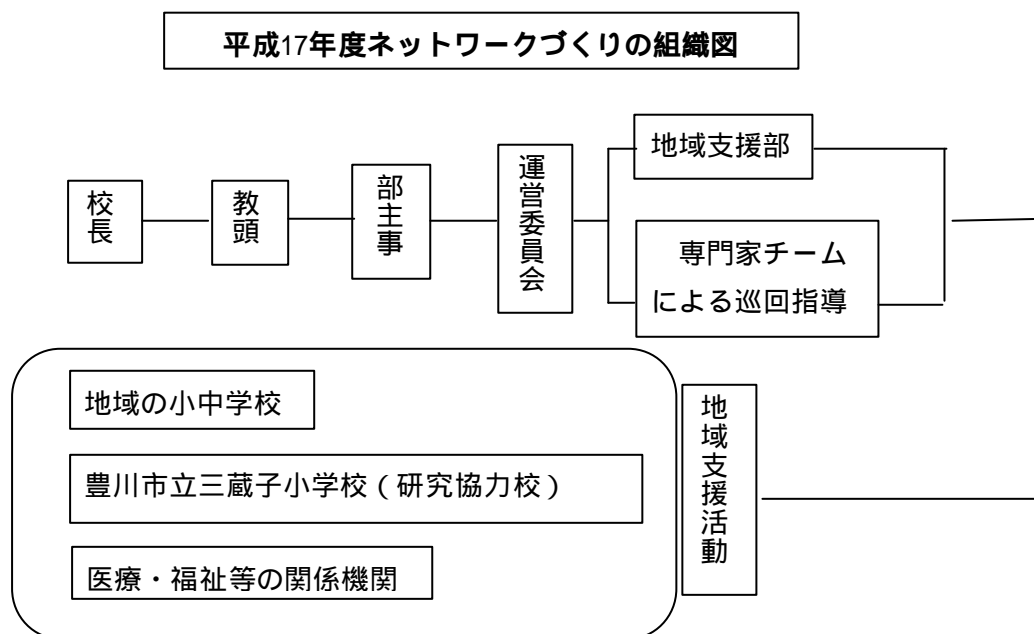
事例対象を中心とした実践研究機能（65%）

学習指導や生活指導等、実際の指導に関する支援機能（52%）

特に教育相談機能については、すべての小中学校から期待があり、本校が果たす役割として、その重要さを知ることができた。そこで、平成16年10月から「たんぼぼ相談」と称して、LD、ADHD、高機能自閉症等の発達障害のある子供の教育相談を始めた。場所は、豊川市教育委員会の協力で豊川市勤労福祉会館のOA室を無償借用し、時間帯は、火曜日、金曜日の午後を実施している。相談の依頼者は、保護者、保育士、教員、知的障害児施設の職員であり、まだまだ手探りの状態ではあるが、関係者との連携を大切にしながら取り組んでいる。

2番目に多かった研修機能については、「たんぼぼ研修会」という名称で、幼稚園、保育所関係者や小中学校の教育関係者に対し、発達障害に関する学習会の場を提供していこうと考え、実施している。

平成17年度からは、豊川市立三蔵子小学校を協力校としてネットワークづくりの研究を進めることになり、下図のような組織で取組を始めた。



専門家チームによる巡回指導とは、平成17年度愛知県特別支援教育推進体制事業の一つ

三蔵子小学校とは、授業参観、発達障害児についての事例検討会、現職研修での情報交換等を通して、特別支援教育相談のネットワークづくりのよりよい方向を探ってきた。その中で、授業中の発達障害児への具体的な支援方法や保護者との関係づくり等、協力校が抱える課題や悩みがはっきりしてきた。これらの課題や悩みを、たんぼぼ研修会の研修内容として取り上げ、地域の保育や教育関係者

へ情報提供し、意見交換する機会をつくり解決策を探るなど、ネットワークを広げる手段にしていきたいと考えている。

また、小学校の現状を具体的に理解できたことは、たんぼぼ相談を進める上でも参考になった。発達障害のある子供の保護者からは、障害の理解や授業での支援に対しての不安がたんぼぼ相談に寄せられるが、小学校での授業形態や進め方を知り、不安の内容が具体的に理解でき、不安解決のよりよい方向が見付けやすくなったと感じている。

関係機関との連携は、個々の相談ケースに合わせて情報交換をしながら進めていく場合が多い。ここでは、次の二つの事例を通して今後のネットワークづくりの在り方を考えてみたい。

一つ目は、たんぼぼ相談で知的障害児施設と連携して実施した訪問相談の事例から、関係機関とのネットワークづくりについて考える。

二つ目は、本校が主催して実施するたんぼぼ研修会を通したネットワークの広がりについての事例である。今年度の8月に教育、保育関係者を対象にして、第2回たんぼぼ研修会を実施したが、研修会後に、本校のセンター的役割についてのアンケートを行った。その結果も踏まえてネットワークづくりについて考える。

2 知的障害児施設と連携したたんぼぼ相談の事例（福祉施設との連携）

たんぼぼ相談には、落ち着きがないとか集団での学習についていけないなど、子供の発達上の問題が寄せられる。相談の依頼者は、ほとんどが保護者だが、時には小中学校の教員等、教育・保育関係者であったりする。相談の内容は、市町村の就学担当者、発達障害の専門医、学校の担任、福祉の関係者との連携を大切にして進める必要があるものばかりである。

例えば、保護者から「小学校の高学年だが、低学年の漢字が読めない。どうしたらよいか」という相談があった。発達検査の結果は、知的な遅れはみられず、視覚、聴覚的補助の仕方を工夫すれば漢字の読み書きの学習が進むと判断できるものであった。在籍校の担任と連携して、支援を進める必要性を感じた。保護者の了解を得た後、発達検査の結果を担任に知らせ、教科書に出てくる漢字にふりがなをふってもらったり、テストの問題文を読んでもらったりするなどの支援をお願いした。担任が更に具体的な支援方法を知るために、たんぼぼ相談の様子を見学してもらったことで連携が始まった。

たんぼぼ相談では、こうした連携が大部分だが、時には、知的障害児施設が療育支援のための訪問相談を進める中で生じた学校教育への疑問や問題を、たんぼぼ相談に投げかけて来ることがあった。

ここでは、A小学校へ訪問相談した事例を紹介する。B知的障害児施設では、A小学校への訪問相談を行い、特殊学級児童の排泄等、身辺自立に関する療育の方法を助言していた。相談が進むにつれて、養護学校の情報を知りたいという申し出がA小学校の保護者からあり、たんぼぼ相談の担当者がその施設職員と一緒に訪問相談を実施することになった。

(1) 訪問相談の目的

- ア 知的障害児施設と養護学校が連携して子供の実態を的確に把握する方法を知らせる。
- イ 気になる行動の原因等について、分かりやすく説明する。
- ウ 養護学校や知的障害児施設がもつ情報を提供する。

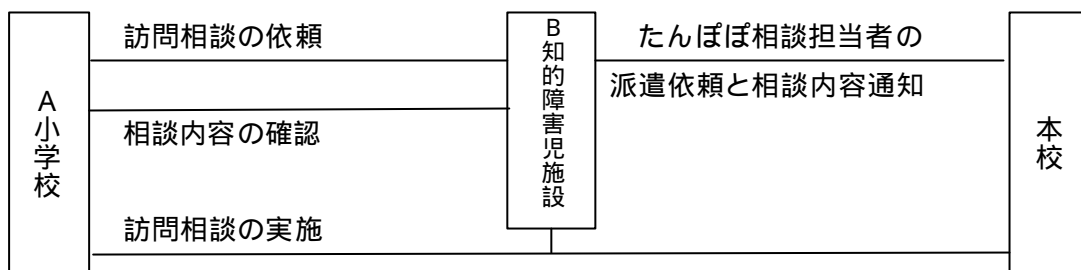
(2) 担当者

- ア 知的障害児施設のコーディネーター 1名
- イ たんぼぼ相談担当者 1名

(3) 知的障害児施設が取り組む訪問相談の位置付け

知的障害児施設が取り組んでいる障害児(者)地域支援事業の一環で行われている。事業の利用者は重症心身障害(児)者,知的障害(児)者,身体障害(児)者とその家族,関係機関の方々である。内容は,在宅支援訪問療育等支援事業,在宅支援外来療育等支援事業,地域生活支援事業,施設支援一般指導事業の四つから成り立っている。訪問相談は,四つ目の施設支援一般事業の位置付けになっており,障害(児)者にかかわる方の研修,相談や支援を行う事業である。

(4) 訪問相談までの手順



(5) A小学校への訪問相談

ア 対象児の実態

学年・性別 小学校高学年・男子

障害の程度 障害名: ダウン症,療育手帳B判定(特殊学級在籍)

運動 ・ 1歳のときに心臓の手術をしたが,現在,運動の制限はない。
 ・ 日常生活動作については特に問題はない。

認知 ・ 言葉が不明瞭で,聞き取りにくい。2語文を言えるときがある。
 ・ 昨日,今日,明日等の概念が乏しい。数概念は3くらいまでである。

(6) 主訴

小学校卒業後は,養護学校への進学を考えているため,豊川養護学校の中学部について,通学の方法,指導目標,卒業後の就職の割合等を詳しく知りたい。初めての宿泊学習について,準備と対応の仕方を知りたい。

(7) 相談の様子

訪問日は,在籍校の球技大会と重なり,担任と保護者との相談であった。相談は,事前の質問に対して用意した資料に基づいて,一つ一つ回答する形で進めた。

初めての宿泊学習に対しての養護学校からの情報提供は,

ア 昼間の活動は学校生活の中から予想できることも多いので,担任に任せることができる。

イ 夜については,養護学校が林間学習で取り入れている家庭への調査票の項目を参考にして,できること,難しいことについて共通理解を図るなど,担任と連携し,対応を考える。

ウ グループ単位での活動が多ければ,本人が協力しやすいメンバーで構成するように工夫をしよう。

エ 活動はゆったりとした時間設定にしよう。

オ 児童福祉施設と連絡して事前に宿泊体験をする。

などを挙げて説明した。

知的障害児施設からの情報提供は,母子分離の経験として宿泊のデイサービス事業を利用することとその申込みや手続きのことであった。

(8) 成果と今後の課題

A小学校は、本校や知的障害児施設から遠隔地にあり、対象児への支援ができにくい状況にあったと思われる。その保護者が同じ障害のある子供の親と相談し、悩みを解決していく機会を十分得られずに過ごしてきたことも推察できる。家族だけで悩み続け、解決しようと試みても手だてがみつからないまま過ぎてきたことも多かったと思う。教育関係者と福祉関係者が協力すれば、明るい見通しや適切な手だてを示すことが可能である。例えば、障害児の就学問題や将来の見通しは、今まで扱った事例からアドバイスすることができるし、訪問相談で福祉制度の説明等を行えば、更に明るく幅広い将来への情報提供が一度にできる。

本校としてもこの訪問相談を通して、福祉サービスの内容、利用の手順等、福祉関係の情報を得ることができ、それを今後の相談活動に生かすことができるようになった。

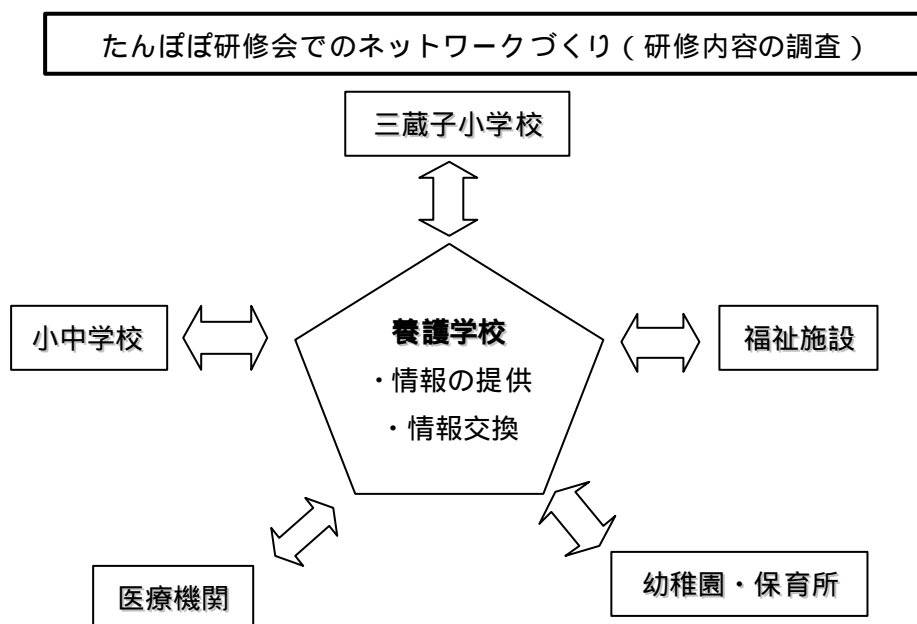
A小学校からは巡回指導の希望もある。子供の実態のとらえ方、支援の進め方等、福祉施設との連携を一層深める必要が出てきている。また、相談の内容によっては、積極的に学校から施設への協力を依頼する必要がある。個人情報への慎重な取扱いに留意しながら連携を深めていく手だてを探っていく必要がある。

3 たんぼぼ研修会を通じたネットワークづくりの事例（関係機関とのネットワーク構築）

たんぼぼ研修会の実施に当たっては、現場の抱えている問題についての情報を集め、研修のニーズを把握することから始めなければならない。

研究協力校の三蔵子小学校への授業参観や事例検討会からは、同級生とうまく遊べない子供、すぐに物などにぶつかってしまう空間認知の弱い子供等の指導上の問題が出された。ほかにも気になる子供が各学年にいるという情報を得たり、「チェック表」（前掲、資料2参照）に基づいた自閉傾向や多動、衝動性の強さ等の気になる子供一人一人の分析表も見たりすることができた。これらにより協力校の現状と取組をより具体的に知ることができた。

これら協力校の状況や小中学校への巡回指導の反省、医師からの情報、保育園児のたんぼぼ相談の様子、福祉施設の情報も整理して研修内容を検討した。



検討した結果、たんぼぼ研修会の内容として、

- 医学的知識に関すること
- 保育の実践に関すること
- 小中学校の実践に関すること
- 福祉の情報に関すること
- 養護学校での取組に関すること

の五つが重要になると考えた。そこで、第2回たんぼぼ研修会では、医学的知識の面と保育所、小学校、中学校での事例を踏まえた意見交換の場を設定していくことにした。

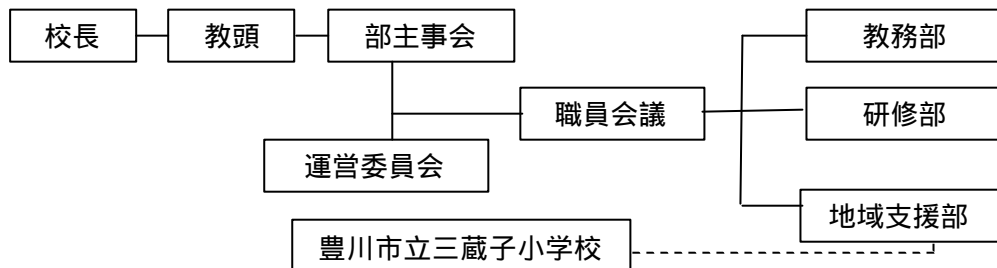
研修会に主体的、研究的に取り組んでいくことは、ネットワークづくりの大切な基盤になると考えている。また、アンケートをとりながら参加者のニーズに応えていくことが、ネットワークの広がりや深まりに通じると考える。

(1) 第2回たんぼぼ研修会の目的

- ア 発達障害のある子供等の指導で問題を抱えている保育士、教員等に指導内容や方法についての情報を発信する。
- イ 保育、教育を進める場合に連携が必要な機関や連携方法等について情報交換を行う。

(2) 第2回たんぼぼ研修会企画、運営の組織

第2回たんぼぼ研修会のネットワークづくりは、地域支援部や巡回指導の専門家チームによる問題点や資料の収集から始めた。今回は、東三河地区全域の保育士、教員等を対象としたため、実際に企画、運営していくには他の校務分掌と連携することが必要だと考え、下記の組織をつくった。



(3) 第2回たんぼぼ研修会の内容とアンケート結果

ア 日程と内容

10:00～12:00 全体会（講演会）

講演「幼児期、学齢期でのPDD（広汎性発達障害）の診断と保護者とのやりとり」

講師 豊橋市民病院 医師

13:00～15:00 分科会（事例発表と協議）

第1分科会 「保育園、幼稚園での実践事例」

～Y君とお母さんとともに～ - 食事の支援を通して -

発表者 豊川市立保育園 園長

第2分科会 「小学校での実践事例」

～特別支援教育のサポートシステム～

発表者 豊橋市立小学校 教員

第3分科会 「中学校での実践事例」

～カウンセリングを基にした広汎性発達障害のあるAとのかかわり～

発表者 豊川市立中学校 教員

イ 参加者とアンケート回収状況

参加者 262 名

幼稚園，保育所 78 名，小学校 87 名，中学校 24 名，本校 68 名，その他 6 名

回収状況 73%（192 名）

保育所 39 名，幼稚園 31 名，小学校 64 名，中学校 17 名，本校 35 名，その他 6 名

ウ アンケートの結果

講演会の内容についての感想

- ・ とてもよかった 146 名（76%）
- ・ まあまあよかった 37 名（19%）
- ・ 少しよかった 2 名（1%）
- ・ 回答なし 7 名（4%）

本校が果たすセンター的役割についての具体的な意見（36 件）

それぞれの意見を大別すると次の 4 つにまとめられる。

- ・ 専門家の講演会や事例検討会等，研修の機会を与えてほしい。（14 件）
- ・ 巡回指導等の回数を増やすことや小中学校での話し合い（校内委員会）に参加するなど指導助言を受ける機会を広げてほしい。（12 件）
- ・ 教員だけでなく保護者や一般の人にももっと発達障害を理解してもらうための啓発活動をしてほしい。（7 件）
- ・ 養護学校での指導内容や障害のある子供たちの社会参加について情報提供をしてほしい。（3 件）

エ アンケート結果の分析

講演会についての結果は，80%近くの回答者が講演会の内容をととてもよかったと答えている。具体的な意見としては，

自閉症とアスペルガー症候群と PDD（広汎性発達障害）の関係が整理できた。

保護者への対応の仕方の基本について理解できてよかった。

学校と専門医との望ましいかわり方の話を初めて聞くことができてよかった。

という好意的な意見が多くあった。このような評価につながったのは，児童精神科医の講演で専門用語が少なく，現場での問題を前もって集めて講師に伝えてあったため，具体的な対応策を話に盛り込んでくれたためだと思う。

また，専門医の講演については，参加者の期待も大きく関心も強いことがよく分かり，ネットワークづくりの中で，医療機関との関係が大変重要だということを感じた。

参加者の意見をまとめると，本校のセンター的役割として，保育士や教員の期待が大きいのは，次の二つであった。

医師等，専門家を招いた研修会の実施

保育所，学校等への訪問相談，指導助言

これらは，養護学校が教育や医療，福祉のネットワークの中心となるというだけでなく，問題を抱える子供一人一人に視点を当てたきめ細かな支援を行う役割を担うことへの期待ととらえられる。

(4) 第 2 回たんぼぼ研修会の成果

分科会の発表者は，園長（福祉施設のコーディネーターからの紹介），小中学校の発表者（豊橋市，豊川市のそれぞれの特殊学級の研究会からの推薦）であった。研修会をつくり上げていく過程で，障害児保育に取り組んでいる保育所の情報が得られ，特殊学級担当者の研究会との連携を築くことがで

きた。研修会の実施は、こうしたネットワークの広がり結び付くことが分かった。

また、社会参加については進路指導部と連携の必要があり、指導内容は、教務部とのつながりを大切にする必要があるなど、校内での連携強化の重要性がはっきりしてきた。

地域が抱える発達障害の子供の問題は多様であることをアンケートの結果は物語っている。多様な問題を一度に解決するのではなく、一つ一つの問題について地道に支援の方策を探っていくネットワークづくりが大切だと考えている。

4 まとめ

地域支援活動で取り組んできた二つの事例から、今後のネットワークづくりの課題を四つ挙げる。

(1) 校内組織の見直し

例えば、進路指導部からの情報が地域支援で必要となるように、一つの校務分掌だけでは、うまくネットワークづくりができない。全校体制での地域支援の在り方を検討し、校内組織の見直しをすることが大切である。

(2) ネットワークの中心となる教育機関の役割の明確化

在学中の発達障害児に対する支援者は、医師、教員、福祉関係者になることが多い。それぞれの支援者は、ケースによってネットワークの中心になったり、連携の重要な相手になったりする。一貫した支援、根気強い支援、幅広い支援をするためには、それぞれの機関の役割を明確にして進める必要がある。訪問相談では、知的障害児施設が、巡回指導では養護学校が中心になる。同じ学校に対して訪問相談も巡回指導も実施する場合は、個人情報やりとりしに気を付けて連携をより強化することで、お互いの立場を認めながら助け合って支援をしていく必要がある。

(3) 関係する教育機関との連携の強化

三蔵子小学校との関係を深めることで、小学校の情報が得やすくなった。特殊学級の担当者会等、市町村で実施している研修会とのつながりもできてきた。たんぼぼ研修会を特殊学級担当者会と共同で開催するなど新たなネットワークの広がりを求め、より密接な連携を図っていきたい。

(4) 発達障害に関する専門的知識の向上

最近の自閉症児へのコミュニケーション支援は、絵カードやシンボル、サイン等、視覚を重視したものが盛んに行われている。こうした情報を詳しく的確につかむことは、たんぼぼ相談や巡回指導等での適切な指導助言につながり、適切な支援ができることはネットワークの広がりにも通じると考える。校内研修の充実や校外研修会への積極的参加が重要である。研修部との連携を図りながら担当者の力量アップに努めていきたい。